

5つの約束

子どもには教えられる事が多いと、改めて感じています。

先日、ある機関誌を読んでいましたら、燕市に住む小学校6年の女兒（Iさん）の作文が目にとまりました。

その内容は、Iさんの体験を基に書かれたものです。

Iさんは生まれながら話す事が出来ず、言葉の病院にも通って声を出す練習をしたそうですが、なかなか話す事が出来なかったそうです。

小学校3年生になると直ぐにいじめられるようになり、「学校に行きたくない」と泣いた事があったそうです。その時Iさんはお母さんに叱られると思ったそうですが、逆にお母さんから「お母さんが守ってあげる。学校に行かなくてもいいよ」といわれ、勇気が出たと述べています。

そして、その時にお母さんから聞いた話を紹介しています。

その話というのは、ある中学校の先生が首の骨を折る大けがをして寝たきりになった時、その先生は、一時は死ぬ事も考えたそうです。しかし、お医者さんや家族、周りの人たちに助けられ、生きるという事は生かされているのだと気づき、その後、感謝の言葉を周りの方達にいつている内に、お医者さんもびっくりする位に回復したのだそうです。

そして、お母さんはIさんに、その先生が心に誓っていたという5つの言葉を語って聞かせます。

- 心は人の痛みが分かるために使おう
- 手足は人を助けるために使おう
- 耳は人の話をよく聞くために使おう
- 目は人の良いところ見るために使おう
- 口は感謝の言葉をいうために使おう

この5つの誓いは、恐らくはその先生が、首の骨を折る大けがをし、一時は死を望む程の絶望の淵に立たされながらも立ち直る事が出来た、その事への感謝の気持ちを形に表そうとしたのだと思います。

Iさんは、「口は、感謝の言葉をいうために使おう」が一番心に残ったといいます。

言葉は人を楽しくさせたり、勇気を与えたりする力がありますが、一方では、人の気持ちを悲しくさせたり、時には、死に追い遣ったりする場合もあります。

Iさんは、今では話せるようになってきているそうです。これは、よい言葉を聞いて

感謝の言葉をいえるようになったからだと述べていますが、そういう言葉の力を、彼女は日々感じながら生活しているに違いありません。

Iさんは、母親から聞かされたお話が、まるで砂地に撒かれた水のように体に染み込んで行ったのだらうと思います。それは、大けがを負い、絶望しながらも立ち直った体育の先生と、いじめを受け不登校になりそうな自分の立場とが重なって感じられたからかも知れません。

お母さんのお話から言葉の持つ力を感じて、それを自分の力にしようと考えた彼女はとても素晴らしいと思います。翻って私は、いつも言葉を操りながら、時々言葉が上滑りしているように感じて反省しています。

「肺腑をえぐるような」という言葉がありますが、残念ながら私には、そこまでの鋭い言葉を持ち合わせてはいません。むしろ、言葉の力に翻弄されているといった方が良いでしょう。直球とも変化球ともつかない球を投げている、そんな感じがしてなりません。

5つの誓いは実にシンプルですが、しかし、それだけに私の心に重たく響きます。ずっと忘れていた感覚です。(塾頭：吉田 洋一)